

サウジアラビアのハファル・アル・バテン基地北方を通過した3機の戦闘機は機首を北東に向けイラク領空を一気に駆け抜けた。眼下にシャトル・アラブ川の湿地帯が見える。いよいよイラン領である。パイロット達に緊張が走る。行く手にザグロス山脈の赤茶けた山塊が立ちほだかる。山脈を越えるとナタンズまでは指呼の間であるが、ナタンズの南方数十キロメートルのイスファハンにはイラン空軍の基地があり、いつスクランブルをかけられるかわからない。

パイロット達は臨戦態勢に入った。イスファハンのモスクのミナレット(尖塔)を視野に入れると3機は高度一万三千メートルから急下降を開始、天空から真つ逆さまに落下する三本の矢となった。超高空から一気に高度を下げ、目標を爆撃したら直ちに超高空に戻る「ハイ・ロー・ロー・ハイ」作戦の第二段階である。

パイロットが目にする地上の風景は一面の荒野であり、視界を横断する道路が幾何学模様を織り成している。しかしパイロットが地形を確認する必要は無い。あらかじめプログラムされた攻撃目標は目の前の液晶画面に映し出され、機首は真つ直ぐ目標に向かっている。彼はただ目を凝らして左手で操縦桿を握り、右手の親指をミサイル発射ボタンに軽く当てただけである。

右翼後方の『マファイア』が下降速度を上げて抜け出した。攻撃の一番手である。そして少し遅れて『エリート』が続き、その後ろに『アブダラー』がつける。三機の陣形がそれまでの三本の矢から一本の槍に替わった。

ちようどそのころ幹線道路から分かれナタンズに向かう軍用道路をトラックが土煙を上げながら走っていた。荷台にはイスファアハンの市場で仕入れた野菜や果物、肉類など食料品が山積みである。モスクから朗々と流れる夜明けの祈りの声を後に出発して数時間。目的地まであとわずかである。太陽がじりじりと照りつけるこの時間、往來の車がほとんどない荒野の直線道路は睡魔が襲ってくる。彼はラジカセのボリュームを眼一杯上げ、メロディーに合わせて大声を出しながらハンドルを握っていた。

その時フロントガラスの斜め、ペルシャン・ブルーそのままの碧空にきらりと物体が光った。ハンドルに両手を預け身を乗り出してその方角を見ると、三本の矢が真っ直ぐこちらに向かってくる。三本の矢がやがて一本の巨大な槍に変身したとき、運転手はそれがジェット戦闘機であることに気がついた。イスファアハン郊外の空軍基地から飛び立つジェット機を見慣れた運転手も、このような辺鄙な場所ですぐ急降下する戦闘機を見るのは初めてである。彼は眠気も忘れ固唾をのんで凝視した。

第5章 先頭のジェット機から一筋の白く細い煙が立ち上り、すぐに二筋目の煙があがった。小さな物体が地上の建物に猛スピードで突っ込んでいく。巨大な砂煙があがり大きな

第5章

爆発音が連続して聞こえた。道路が脈動しトラックは危うく路肩をはずれそうになる。運転手はあわててハンドルにかじりつきブレーキを踏んで急停車した。様子を確かめようと窓を開けた運転手の顔を熱風と砂塵が襲いかかった。砂煙の中から戦闘機が急上昇するのを運転手は茫然と眺めていた。

『エリート』は『マファイア』の放ったレーザー誘導爆弾「バンカーバスター」2発が目標地点を正確にとらえたことを確認した。しかし2回の爆発からは土煙しか上がらなかった。地中を数十フィート、強化コンクリートなら数フィートを貫通すると言われる「バンカーバスター」も地下の核施設までは着弾しなかったようである。『エリート』は直ちに第二次攻撃体制に入り『マファイア』と同じ航跡をたどり同じ高度と距離から同じように2発のミサイルを続けて発射した。そして発射と同時に機首を立て直し急上昇モードに入った。「ハイ・ロー・ロー・ハイ」戦術の最後の仕上げである。

赤外線レーダーが白い砂埃の奥に熱線を感じた、との報告が三番機の『アブダラー』から入った。後は止めを刺すだけである。『エリート』は『アブダラー』に攻撃を命じた。三番機は両翼にバンカーバスターを各一基、そして胴体下部にもう一基「バンカーバスター」をはるかに上回る破壊力を持った究極のミサイルを抱えていた。

究極のミサイルは「バンカーバスター」の攻撃でも敵の施設を破壊できない場合に

限って発射されることになっていた。この究極のミサイルを発射すれば施設が全壊することは間違いなかった。それは施設に働く人間の全滅を意味し、また周辺地域もその後長期にわたり深刻な被害を受けることは必至である。即ち放射能汚染と言う被害である。

戦闘機に搭載された小型核ミサイルはイスラエル国内の極秘の地下貯蔵庫に眠っている核弾頭をもとにピンポイント爆弾として開発したものである。核ミサイルを使用すれば国際問題となるのは陽の目を見るよりも明らかであるが、その時は、放射能汚染はナタンズの核物質によるものであり、それこそイランが核濃縮を行っていた証拠だ、と言い張るつもりであった。強弁とこじつけはイスラエルの得意とするところである。

『エリート』は急上昇から左旋回し、目標を視認できる態勢をとった。砂塵が少し納まり地上に噴火口のような穴が現れ、中心から白煙が上がっている。砂煙とは明らかに異なり地下で火災が発生していることを示す白煙である。5発目の「バンカーバスター」が白い航跡を引いて噴火口に吸い込まれていく。次の瞬間そこから真っ赤な火柱が飛び出した。噴火口の周囲数カ所から次々と人間が飛び出してくる。まるで巣から這い出る蟻を見ているようである。5発のバンカーバスターでナタンズの施設は

「作戦成功！」。『エリート』は小さくしかし興奮に震えた声で本部基地に伝えた。基地で司令官以下の幹部が快哉を叫ぶ姿が目に見えるようであった。▲義父もきつと喜んでいるに違いない。V中東戦争の勇士と称えられはるか遠くにあった岳父の背中が少し近くなったような気がした。これで無事に帰還すれば正真正銘の『エリート』になれると彼は確信した。

ナタンズ爆撃作戦は結局バンカーバスター5発を撃ち込んで終了した。『アブダラー』機にはまだ左翼にバンカーバスター1発、そして胴体下部に小型核ミサイル1発を残していた。しかし異変に気付いたイラン戦闘機がイスファハンを緊急発進していることは間違いなく、現場に長くはとどまっていられない。2発のミサイルを抱いた『アブダラー』機を含む三機は急上昇しイラン領空外へと向かった。レーダーはイスファハンの空軍基地を発進したイラン機がすぐ後ろに迫っていることを示していた。

イラン機が国籍不明機を発見した時、既にイスラエルの3機はナタンズ爆撃は終わった後だった。イラン空軍にはAWACSのような優秀な早期警戒機もなければ、防空レーダー網も貧弱である。さらに彼らが保有している戦闘機は一時代前のもので性能も劣り俊敏なF16に遠く及ばない。結果的にイラン機は緊急発進したものの、空爆を阻止できなかったばかりでなく、F16に迫いつくこともできず、彼らをやすやすと領空外に逃亡させただけであった。

イランからイラク領空に戻った3機は往路のルートを逆にたどり基地に帰還するだけである。燃料計は既に四分の一以下になっており自力での帰還は難しいが、途中まで空中給油機が迎えに来る手はずになっており何も心配することは無い……はずである。

しかし基地の指令は思わぬものであった。三機に対して進路を南に変更しペルシャ湾上空をホルムズ海峡に向かえ、と言うのである。三人のパイロットは我が耳を疑った。